

## カザフスタン見聞記（下）

### 中国とカザフスタン

諏訪一幸

「上」では初めて訪れたカザフスタンそのものを取り上げました。この「下」では、私の研究対象である中国という視点を取り入れて、カザフを考察してみたいと思います。

#### 中国・カザフ関係の現状

中国とカザフスタンは、おおむね仙台・鹿児島間に相当する 1700 キロもの国境を挟む隣国関係にあります。近年ではテロ対策など安全保障面での協力の必要性もあり、政治的安定を保証し、経済面での相互発展を促す関係構築が両国にとってますます重要な政策課題となっています。

国家間の政治的良好さを示す一つのメルクマールは継続的な要人往来です。2012 年の尖閣諸島「国有化」以降、首脳往来がストップしたままの日中関係と違い、中国とカザフスタンの間では、頻繁な首脳往来が行われています。今年に限定しても、5 月にはナザルバエフ大統領が「一带一路」国際経済フォーラム出席のため訪中していますし、続く 6 月には習近平国家主席が上海協力機構（SCO）首脳会合に先立って、カザフを公式訪問しています。また、先般訪中したカザフの第一副総理は、中越国境に近い地方都市で開かれた中国・アセアン博覧会のオブザーバーとして初参加し、両国関係のさらなる強化を呼びかけています。

両国は近年、経済分野での協力関係も強めています。カザフ側資料によると、2016 年の貿易相手国・地域別シェアで、中国は EU（39.0%）、ロシア（20.4%）に次ぐ第三位（12.7%）と、同国にとって最も重要な貿易パートナーの一員となっています。一方、対カザフスタン投資額で見ると、中国は 2009 年以降、一貫してロシアを上回っています。これに関連し、中国側の担当大臣（商務部長）は今年 6 月、「中国とカザフスタンの間には生産能力向上を旨とする 51 の早期実施商業投資案件があり、うち 3 つは実現済み、6 つは進行中で、今年にはさらに 7 件を着工する予定である」と、誇らしげに発言しています。ただ、今回アスタナの日本大使館で伺ったお話によると、これらプロジェクトの中には環境汚染が懸念されるポリプロピレン工場建設など、中国国内では実施できない「筋悪」案件も含まれているのではないかと疑念の声もカザフ民衆の間にはあるようです。

中国において、同国とカザフスタンの良好な経済協力が語られる際、具体的に言及されるのが次の 2 つのプロジェクトです。

一つ目は、ユーラシア大陸のほぼ中央に位置するカザフスタンがもつ地政学的、戦略的重要性をもたらす協力関係です。中国は 2011 年 3 月から、同国と欧州をつなぐ国際コンテナ貨物列車の運行を行っていますが、カザフスタン訪問中の習近平国家主席が 2013 年 9

月に「大シルクロード構想」（「一帯一路」構想の「一帯」の原型）を初めて提起して以降、同列車運行と運行におけるカザフスタンの重要性がにわかに高まっています。中国各地を出発した中欧国際コンテナ貨物列車が西の国境（阿拉山口）を越えてまず入るのがカザフスタンであり、広大な国土を持つ同国を抜け、ロシアを過ぎれば、東欧、そして西欧。地図を眺めると、その重要性に合点がいけます。一方のカザフ側でも、2000年代に入ると、中部のジェズカズガンからカスピ海に近い西部のベイネウに伸びる鉄道（約900Km）が敷設されるなどしています。ナザルバエフ大統領が近年提起した「ヌルルイ・ジョル」（新経済政策「光明の道」）と「一帯一路」の合流で、カザフ国内の交通インフラ整備がさらに進むという明るい未来像が描かれているようです。

二つ目は、ホルゴス国際国境協力センターです。中国側資料によると、同センターは「世界初の国境をまたぐ経済貿易区であり投資協力センター」であると喧伝されています。同センターは2003年6月、ナザルバエフ大統領が胡錦濤国家主席（当時）に対しておこなった国境自由貿易区構想に基づいて建設に移されたもので、総面積5.28平方キロ、うち中国側が3.43平方キロ、カザフ側が1.85平方キロとなっています。センターの運営には少なからぬ問題があるとのレポートもありますが、先般の習国家主席訪問時に発表された共同声明では「同センターの共同運営をさらに強化する」との一節が盛り込まれています。

## アスタナでの中国プレゼンス

私はここ数年、今回のメンバーの一員であり、職場の同僚でもある五島文雄教授と東南アジア大陸五か国をめぐり、中国の進出ぶりを探る現地調査を行っています。その結果、各国の対中感情や対中政策は異なるものの、いずれの地においても中国（企業と人）の存在感が他国に比し群を抜いている点では共通していることを確認しています。さて、カザフや如何？

カザフに渡るにあたって、関連書籍やネット検索で事前情報入手に努めた結果、私は、アスタナには「北京パレス」という中国系ホテルがあり、習近平国家主席がカザフを訪れた際にはそこに泊まった「らしい」ことを知りました。そこで、またまた濱本教授と、ホテル関係者への突撃取材を試みました。記者として長年活躍されてきた経歴をお持ちの濱本さんの押しの強さが奏功し、私たちは北京パレスの責任者に話を聞くことができました。

40代前半くらいでしょうか、以下が長身の王さん（仮名）が語る「アスタナの中国（人）」です。「北京パレスは、北京に本社を置くホテル管理会社“陽光酒店集団”が経営しています。パレスはカザフスタン国内ではアスタナとアルマティにあり、習近平主席は確かにここに宿泊されました。アスタナの北京パレスは10年ほど前に開業しましたが、私はその時から一貫してここで働いています。ここに来る前には北京にいましたが、その前は故郷西安の日航ホテルに勤めていました。カザフの関連法規によると、このホテルでは10数人程度までは中国人が働けることになっていますが、現在は7-8人とどまっています。万博目的の中国人観光客が来ているため、現時点での宿泊客はその約半分が中国人となって

いますが、普段はビジネスマンと観光客を中心に、全体の10%程度です。アスタナの長期滞在中国人は数十人程度でしょう。アルマティには数万人規模の中国人長期滞在者がいるといわれることもありますが、実際にはせいぜい数千人程度でしょう」。

アスタナは、いうまでもなく、中国の隣国であるカザフスタンの首都です。ですから私は、ビエンチャンやプノンペン同様、アスタナ市内でも中国の存在を視聴覚的に容易に確認できるものと思っていたので、王さんの話で肩透かしを食らいました。実際、私が街で目にしたのはレストラン「公主飯店」の中国語看板一枚であり、耳にしたのは万博中国館入口の行列に並ぶ中国人一家四人が話す南方訛りの中国語一回のみでした。「せいぜい数千人程度」しか中国人のいないアルマティに近い将来絶対行く！との野望を抱くようになったのは、至極当然のことです。

以上がビジュアル的な中国のプレゼンスですが、対中認識面では複雑なものがありそうです。

やはりと言いますか、現地の識者からは、中国の強い経済力への期待感が何度も表明されました。とりわけ、交通インフラ整備分野における、さらなる貢献への期待です。私が最も印象深かったのは、「一带一路」構想が経済という視点からカザフスタンの重要性をとらえ、それがやがて中央アジアの統合を促すであろうとの指摘でした。つまり、これまで言及されてきたカザフの重要性はソ連の脅威に対抗するという安全保障面からのものであったのに対し、「一带一路」はカザフの持つ経済力に着目していること。そして、中国が経済協力を前面に押し出すことで、過去25年間それぞれ異なる利益を追求してきた中央アジア五か国の統合が促進されるであろうということなのです。アスタナ国際金融センター事務局長によると、同センターに二つ設ける予定の副総裁ポストの一つには上海証券取引所関係者が就くとのことで（もう一人は米ナスダック関係者）、金融面でも中国の協力を期待していることがわかりました。

一方で、中国に対する強い警戒感の存在を指摘する識者も複数いました。

カザフの多くの人々、とりわけ旧ソ連時代から政権を担っている人々の多くが「中国は最大の敵」という認識を今でも持っており、最終的には信用できないと考えているというのです。その指摘に、私は「ベトナムと同じだな」と思ったのですが、氏はその根拠として二つの事例を紹介してくれました。

一つ目は、日本人への対応と違い、カザフでは中国人へのビザ免除措置が取られていないこと。

二つ目は、昨年発生した改正土地法問題です。カザフ政府は、同法改正によって外国人への土地賃貸期間を従来の5年間から25年間に延長しようとしたものの（カザフでは外国人の土地所有は認められていません）、「そんなことをすれば、中国人にカザフの土地がすべて渡ってしまう」との反発と懸念の声が各地から上がり、全国的規模でのデモに発展。こうした事態を受け、ナザルバエフ大統領は同法施行を15年先送りしたのですが、この措置は実質的な廃案を意味すると現地では理解されているようです。

期待感と警戒感の並存。私は東南アジア大陸部でも強く感じています。

ところで、私は今回アスタナで運よく（と言いますか）、ご両親が中国新疆生まれのウイグル人女性に出会ったのですが、ご両親は1962年に中国からカザフに移住したそうです。実はこの1962年という年は、新疆ウイグル自治区のウイグル人ら数万人がわずか一か月余りの間に中ソ国境を越えてソ連側に逃亡したとされる事件（新疆事件）が発生した年です。この事件については、当時の中ソが深刻な対立関係にあったことが影響しているのでしょうか、中国では「ソ連陰謀説」が広く流布されていますが、真相はいまだ闇の中です。このウイグル人女性は別れ際に、「両親が逃げてきてくれて本当に良かった」と、ポツリと言いました。こうなると近い将来、インタビューのために再訪しないといけません。

### ナザルバエフ大統領と「独裁政治」

中国共産党の第19回全国代表大会が10月18日に開幕し、習近平政権第二期（6年目-10年目）がスタートします。習氏は建国の英雄毛沢東をもしのぐ長期政権を築こうとしているのではないかと憶測が流れていますが、毛沢東は27年（1949-1976年）にわたり、最高指導者の地位にありました。尤も、最晩年の数年間は肉体的衰えのため、良きにつけ悪しきにつけ、指導力を発揮することができませんでした。

ひるがえって、カザフスタンの最高指導者であるナザルバエフ大統領は、1991年の独立以降、一貫して最高指導者の地位にあります。まもなく77歳になる同大統領の任期は2020年までですが（この時点で在位30年）、憲法改正によって、「初代大統領に限り三選禁止の適用は除外される」ので、終身大統領に居座ることも可能なわけです。実際、後継候補者に本命はいないようですし、ナザルバエフ大統領に健康上の不安は外見上見られず、また、ご本人も次期大統領選への出馬をほのめかす発言をしています。平壤訪問時ほどではないにしろ、2009年、軍政下のヤンゴンを初めて訪れた際の緊張感にも似たものをもって、私のアスタナ訪問は始まりました。

しかし、結局のところ、私は、そしておそらく残りのメンバー9人も、カザフ滞在期間中に何らかの緊張感を覚えることはありませんでした。また、私の予想と異なり、政治的スローガンもなければ、ナザルバエフ大統領を称えるポスターや銅像を街で見かけることはありませんでした。「たぶんあるだろう」ということで、出発前に同僚から購入を頼まれた「手を挙げるナザルバエフ大統領の置物」のようなものも、土産物屋にはありませんでした。

一方で、個人崇拜としか言いようのない状況に、何回も遭遇しました。現職であるにも関わらず、ナザルバエフ国際空港、ナザルバエフ大学といった具合に、自らの名前を冠した施設を造らせる或いは容認する国家指導者がどの程度いる（いた）のでしょうか。あの毛沢東時代の中国ですら、「毛沢東思想」（尤も、中国共産党はこの場合の「毛沢東」は毛沢東個人を指すものではないとしています）と狂乱の文革時代の毛沢東神格化を除けば、このような現象はありません。大統領個人の業績を称賛する「ナザルバエフセンター」に至っては、かの北朝鮮にも類似の施設はないのではないのでしょうか。政治的自由度が急

速に狭まっている中国ですが、さしもの習近平さんも、「習近平センター」を造るようなことはしないでしょう。そのようなことをしたら、「時代の流れに逆行する」という批判の声が党员を含む大衆から湧き上がると思います。

加えて、カザフスタンの政治制度です。2015年の大統領選挙で、ナザルバエフ大統領は何と97.7%の得票率で当選しました。他にも二人の候補者がいましたが、これでは「競争選挙を行った」と対外的にアピールするにしても、説得力に欠けます。また、大統領が総裁を務める「ヌル・オタン」（輝く祖国）党が圧倒的多数を占める上下両院では2つの野党が下院の一部議席を占めていますが、政府に登録されている6つの野党の多くが政権側の政策を正面から否定することはないそうです。反体制派の新聞もあるものの、SNSでの過激な反政府的言論を理由に拘束されることもあるそうです。

ところが、です。奇妙なことに、今回出会った現地の方々の口からは、ナザルバエフ大統領に対する敬意が繰り返し表明されたのです。しかも、それぞれが「自分の言葉」で語っていたこともあり、極めて自然な行為のように感じられました。党政府関係者（に限定され、一般大衆は含まれません）から聞かされる指導者への敬意が、公式報道に沿った「金太郎飴」的な言い回しで、ほとんど義務化している中国とは違うように思えました。

敬意表明に共通する根拠は、日常生活が豊かになったという点です。資源が豊かとは言うものの、いまだ電気が通っていない地方も少なくないそうです。また、貧富の格差も存在し、最も豊かなアティラウ州と最も貧しい南カザフスタン州の住民一人当たりのGDPには10倍近い開きがあるそうです。しかし、豊かになったという実感は多くに共有されているようです。ナザルバエフ大統領の外交政策、とりわけ、万博やユニバーシアードといった大型の国際イベント招致に成功したこと、中国とロシアという二つの大国との関係をバランスよく処理し、地域におけるカザフのプレゼンスを高めたことを称賛する声も聞かれました。現地では、「中央アジアの中心はタシケント（ウズベキスタンの首都）からアスタナに移った」と誇らしく語られています。

経済的豊かさと国際的地位向上をもたらしたという点では、規模の違いはあるものの、中国もカザフスタンも同じです。しかし、政治に対するカザフの人々の一種の「おおらかさ」を理解するには、その歴史や文化、民族性などを幅広く知る必要があるのだと思います。さらに、しばしば独裁者と形容されるナザルバエフ大統領個人を如何に理解するかについては、勝茂夫ナザルバエフ大学長のお話から重要なヒントを頂きました。日本人の中でナザルバエフ大統領に間違いなく最も近い同学長によると、大統領が尊敬するのはサハロフ、ゴルバチョフ、そしてリー・クアンユーなのだそうです。リー・クアンユーを高く評価し、彼の国家統治術を学ぶ努力を続けている点において、歴代の中国指導者とナザルバエフには共通点があります。しかし、中国の場合、サハロフとゴルバチョフは「ソ連を崩壊させた張本人」であり、反面教師以外の何者でもありません。学長のおっしゃるとおりであれば、ナザルバエフ大統領に独裁者のレッテルを貼るのには慎重にならざるを得ません。

多くの収穫を得た私のカザフへの旅も終わりに近づいてきました。アスタナを出て、アルマティで乗り継いだ私たちの成田への最終中継地はインチョン国際空港だったのですが、空港でのある光景に、私は一挙に現実の世界に引き戻されました。空港内の至る所で、他の旅行者への迷惑などお構いなしに、多くの中国人若者が派手に荷物整理をしていたのです。いわゆる運び屋です。中国の経済発展は、間違いなく中国人一人ひとりのエネルギーに支えられてきたのですが、「国際社会から尊敬される中国（人）」になるのには、もう少し時間が必要なようです。

2017年9月20日